

# 視覚のない世界を捉える

リベラルアーツ研究教育院/  
環境・社会理工学院社会・人間科学系  
伊藤 亜紗 研究室

伊藤 亜紗 准教授 1979年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化専攻美学芸術学専門分野修了。2013年より東京工業大学に着任。2016年より改組のため同大学リベラルアーツ研究教育院/環境・社会理工学院准教授。



障害者というと、文字通り障害を抱えている人というような、負のイメージがどうしても離れない人が多い。そんな中、伊藤先生は障害者に対して新しいアプローチを試みている。障害者のものの見方を観察して、新しい情報を得ようというのだ。先生が研究を始めたきっかけから、現在どのようにして斬新な研究を進めているか、追っていく。

## 障害は「害」なのか？

皆さんは、バスの入口や出口が階段状ではなく、なめらかな斜面になっているものがあることをご存知だろうか。そのようなバスはノンステップバスと呼ばれており、車椅子の人でも簡単かつ安全に乗れるような工夫が施されているのである。目の見えない人でも渡りやすいように青信号の時に音が出る信号があったり、階段や風呂場などちょっとした場所にも手すりが設置されていたりと、バス以外にも多くの場所でさまざまな工夫が施されている。このように障害者やお年寄りにとってより暮らしやすいような工夫をしていくことはバリアフリーと呼ばれており、高齢化の進む現代においてこの工夫が推進されている。

そもそもなぜバリアフリーを推進するのかといえば、障害者やお年寄りが暮らしやすい社会を作りたいという思いがあるからである。裏を返せば、彼らは健康者よりも暮らしにくいという考えが根

付いているのだ。社会においては、抱えている障害はどのようなものであろうと緩和してあげるべきだという福祉的な意識が強く、とくに障害者に対して生活しにくいのではないかというようなマイナスイメージを持っている人は少なくない。

しかし、子供の頃にはそのような倫理的な考え方はあまりなかったはずだ。みなさんの中にも、幼いころに視覚障害者が杖をもって歩いているのを興味本位で眺めたことがある方がいるだろう。このとき親にあまりじろじろと見るなと怒られたかもしれないが、子供にとっては目が見えないのにどうやって歩いているのだろうという単なる疑問が湧いたために見ているに過ぎないのだ。子供のように、視覚障害者は目が見えないのにどうやって生活しているのか、どういう世界で生きているのかという疑問を抱き、純粋な興味を持つことは必ずしも悪いことではない。

このように、障害というテーマに対して、どうすれば和らげてあげられるだろうかという福祉的

な発想ではなく、障害を持った上でどのような生活を送っているのかという生物学的な視点からのアプローチをしたいと考え、近年その研究に力を注いでいるのが伊藤先生である。先生は障害者、その中でも特に視覚障害者がどのように世界を把握し、生きているのかということを研究している。以下ではその研究を始めることになったきっかけについて触れていく。

## きっかけ

先生が最初に視覚障害者について考えるきっかけとなった場所はダイアログ・イン・ザ・ダークという施設である。この施設は、中にベンチがあったり遊具があったりと公園のようになっている。ここまではどこにでもあるような施設に思えるが、なんとこの施設内は外の光が入らない完全な暗闇になっているのである。この中に7、8人の初対面の人たちと一緒に入り、視覚障害者に誘導してもらいながらゆっくりと歩いて回る。これにより、視覚障害者が普段どのような感覚で歩いているかある程度体験することができるのだ。

先生は実際に体験していく中で多くのことに気づいた。まず、視覚が機能していないと初対面の人であっても距離感を感じずに話してしまうということだ。暗闇の中では話していないと自分の存在が消えてしまうような感覚に陥るため初対面の人であっても話そうとするのだ。それに加えて恥ずかしさもなくなってしまうので、初対面の人とも手をつないだり、触れ合ったりすることに抵抗がなくなる。さらに、普段健常者が意識していないような感覚が非常に敏感になる。たとえば、目の見える人が坂を登ったり下ったりするときにはどれくらい地面が傾いているか特に考えずに歩いているが、視覚障害者は足の裏で地面の傾き具合を敏感に感じ取り、自分が今どのような傾斜の道を歩いているのかを頭の中で構築しながら歩いている。坂道ひとつを取っても、目の見える人と見えない人では意識の仕方が違うのだ。

ダイアログ・イン・ザ・ダークで障害者の知覚する世界に興味をもった先生は、しばらくして、目の見えない人と一緒に美術作品を鑑賞するツ

アーに参加した。視覚障害者が絵画を鑑賞する際には、普通は点字や触覚などに頼ることが多いのだが、このツアーでは少し独特な鑑賞方法をとっている。まず目の見える人が絵を見て、何が描いてあるか、どのようなことを感じたかを目の見えない人に説明する。目の見えない人はその説明だけでどんな絵なのかを構築していくので、頭の中でいまいちはっきりしない部分は目の見える人に尋ねる。すると、そのようなところは目の見える人があまり注目していない部分であることが多く、目の見える人にも新しい発見がある。このように、目の見える人も目の見えない人も新鮮な気持ちで美術作品に触れられるツアーなのだ。このツアーで先生は、一緒にいた視覚障害者のひとりの、好きな色があるという発言に衝撃を受けた。色は視覚で把握するものなので、見たこともないのに色に対して思うことがあるということに驚いたのだ。話を聞いてみると、先天的に全盲な人でも色彩に対する知識があり、たとえばピンクであれば、女性的で、桃の色で、チューリップにもピンク色のものがある、というように知識を集合させてイメージを膨らませているのだという。

色の概念に対するこのような視覚障害者の振る舞いをはじめとして、視覚障害者の一挙一動は、当時の先生にとって驚きの連続だった。彼らがなぜそのようなことを言うのか、どうしてそういう行動をとるのかをもっと解明したいと思い、作品鑑賞のツアーに参加していた視覚障害者にインタビューを始めて、そこから具体的に研究という形で先生は視覚障害者と関わるようになっていった。

## もし視覚という概念がなかったら？

先生はその後、視覚障害者の世界について知るために、視覚障害者にインタビューを始めた。そこで先生がまず気づいたことは、世界の認知の仕方が人によってまったく違うということであった。例えば、自分の身の周りに何があるか知りたいときや、自分の行きたいところへ向かうときの行動ひとつとってもまるで違うのだ。耳の感覚に頼っており、声を出しただけでその反響でまわりに何があるかわかってしまう人もいる。また、どんど

ん周りのものにぶつかって周りに何があるかを認知する人もいれば、自分の力だけに頼らず、すぐにほかの人に尋ねるような人もいる。目が見えていない分、どのように周りを知覚し、把握するかという点においてさまざまな選択肢が考えられるのである。

また、健常者にとって目で見えるものは絶対的であるという認識があるが、視覚障害者にとってはそうではないということも実感した。先生は視覚障害者の世界を知るために、盲学校を訪れたことがある。その生徒たちの中に、架空のキャラクターを作って遊んでいた子供たちがいた。彼らの考えたキャラクターはゆりにゃんという名前で、どこかの星に住んでおり、花を持っていて気分によってその花の色が変わるというような細かい設定があった。ゆりにゃんはある2人の生徒の間で共有されていたキャラクターで、2人の考えている特徴は同じであった。そこで、ゆりにゃんの絵を2人に描いてもらった。目の見えない彼らが絵を描くときには、薄い紙を柔らかいものの上に置いてボールペンで描く。そうすると紙が少しへこむので、そのへこみを指でなぞって少しずつ絵を描いていく。目の見えない彼らは描いているものを視覚ではなく、触覚で認知するのだ。しばらくして描いてもらったものを見ると、2人ともまったく違う種類のキャラクターを描いていた。もし目の見える人であれば、そのキャラクターを見れば別のキャラクターだと認識するだろう。そのキャラクターに限らず、健常者にとって目に映る姿が違っていたら、それは認知している対象が違うことになる。しかし、視覚障害者は、実際の姿や思い描いているものが違っていても頭の中で共有している情報が同じであればそれは同じものだとみなす。すなわち、インプットの内容が同じでも、アウトプットは人によって全く異なるのである。

この事実を踏まえて、目が見えない人は、目の見える人よりも暮らしにくくなるという考え方は間違っているのではないかという疑問が先生の中に生まれた。つまり、ものの捉え方がそもそも違うのだから、目が見えない人の側から物事を考えれば、目の見える人は気づけなかったようなアイデアや発見があるかもしれないと考えたのだ。



写真 ワークショップのようす

撮影者：御厨慎一郎、提供：森美術館

そこで、先生はあるワークショップを開きたいと考えた。それは、人類が視覚を持っていなかった場合、どのような社会を築くのかということをテーマとしたワークショップである。建築や情報の伝達はどのように変わるか、また食事の形式なども現在とどう異なるかなど、さまざまなことについて話し合うのである。

先生はまず、知り合いの人たちと一緒にワークショップのシミュレーションをしてみた。すると、いろいろなアイデアが提案された。たとえば、お金は現在のような硬貨や紙幣ではやりとりがしづらいため、触覚をより重視した結果、りんごを買うときに、1個150円といった硬貨による支払いではなく、50gの粘土のようなものを支払うというように、重さが単位の基準になるのではないかと。また、活動時間も昼と夜というような光での区別が存在なくなり、気温をベースにした時間軸や時間の定義ができていくのではないだろうか。このように、現実と比べて生活様式にどのような差異が生まれるかについて参加者と共に意見を交換しディスカッションを行えば、さらに新しいアイデアが生まれるはずだと先生は確信し、ワークショップを開くことを決心した。

まず、東京の六本木にある森美術館でワークショップが開催された(写真)。上に述べたような、全盲の生活を送る上で必要となりうるテーマについて参加者がチームごとで話し合い、もし視覚という概念がなかったら、という仮想の国をデザインしていくのである。そこで生まれたアイデアの一例を紹介しておこう。コンビニやオフィス

などで傘をいったん傘立てに立ててしまうと、目の見えない人は傘立ての中のどの傘が自分のものかわからなくなってしまう。そういう面から、視覚のない世界では所有という概念がぼやけ、共有という概念を重視するような生活が営まれるのではないかというものだ。これを聞いてみなさんもなるほど、と納得したのではないだろうか。このように私たちが当たり前と思っている概念がアイディア1つで覆ってしまう可能性があるのだ。先生は、ワークショップを通して最終的に、現在の社会にも応用できるような革新的なアイディアが生まれてくれれば嬉しいと考えている。

## 身体へのアプローチ

障害者に対する上記のような研究は、身体というものの認知の仕方について解明しようという生物学的な視点と、言語を使って曖昧な感覚を明瞭にしていく美学的な視点が結びついた領域横断的なものである。先生自身、現在こそ芸術を専門としているものの、学生時代までは生物学者を目指していた。もともと身体の研究に興味があり、生物学からの身体へのアプローチを考えていたのだ。しかし、大学に入ると、自分が思い描いていたような実験がなかなかできないということにもどかしさを覚え、それならば文学を通して身体について考察したいと思い、文転する。それからしばらくの間、先生は詩の研究をすることで、文学的な視点から身体について考えたり、また芸術的な視点から身体にアプローチしたりしていた。

しばらくして東工大へ赴任し研究を始めるが、再び違和感を覚え始める。難しい本を読んで論文を書くことが、身の回りのリアルなものと結びついていないのではと思ったのだ。論文を書く上で、その分野についての過去の論文を読むことは大事だが、それだけではその論文を研究することになりかねず、本来の目的を見失ってしまうのではないかと先生は考えた。

そこで先生は、直接人に話を聞いたり、人を観察したりといった、もっと身近な研究がしたいと考えた。身体についても、哲学的、文学的、抽象的な身体ではなくて、より具体的でリアルな身体

について考えたいと思うようになったのだ。

ならば、どういうものを題材にすればリアルな身体は扱えるのだろうか。先生は、自分と比較しやすい身体について調べようと思った。違いがはっきりしていれば注目するポイントもわかりやすく、研究しやすいと考えたからだ。そうすると、今度は自分とどのように異なる身体を調べるべきだろうか。性別や年齢の差でもいいが、日常で最も違いを感じやすいのは障害者であると先生は考えた。特に、視覚が遮断されているということが一番シンプルでわかりやすいと考え、視覚障害者を題材にすることにしたのだ。

では、視覚障害者の研究を通じて、この先どういうことを目標にしているのだろうか。先生は、単にわたし一人の知的欲求を満たすだけではなく、社会における障害に対する捉え方が変われば嬉しいと語った。先生にとって、身体について研究するということは、研究の対象であると同時に理解するベースが身体であるという意味であった。つまり、視覚障害者がどのように世界を認識しているかという情報を知りたいのではなく、そのような身体で自分が知っている空間を把握したとき、周りに対する自分の考え方がどのように変わるかについて興味があったのである。冒頭でも少し触れたように、現代では障害者と健常者の違いに関心を持つことはほとんどタブーであるかのように扱われている。もちろん配慮は必要だが、同時にこの素直な関心を深めていくことで、違いを面白く思えるようになるといい。そのためには、自分と異なる体のことを知りたいという気持ちに素直でいることが重要であると語ってくれた。いつの日にか、障害という言葉が別の言葉に変わる日がくるかもしれない。

## 執筆者より

今回の取材を通して、障害というテーマが現代でいかに重要かを学びました。ご自身の研究や執筆活動でお忙しい中、快く取材に応じてくださり、度重なる質問にも丁寧に答えてくださった伊藤先生に心より感謝申し上げます。

(上原 綾介)